

基調講演会

「パブリック・アーケオロジーから

文化財保護への提言」

イースト・アングリア大学

(まつだ・あきら)
松田 陽

ご紹介にあずかりました松田陽でございます。イギリスのノリッチという場所から参りました。私には所属が三つあるのですが、イースト・アングリア大学が本所属となります。もう一つはセインズベリー日本藝術研究所でありまして、こちらもノリッチという街にあります。ということで、お話を開始する前に、少しでもノリッチのご説明をいたします。

ノリッチはロンドンから電車で二



時間ほど北北東に行った場所にあります。日本の方に説明する際には、日本に一番近いイギリスの都市だと言っております。イングランドの中で一番東にある都市、私はそこに普段おります。ノリッチからは、ロンドン経由で日本に行くよりも、アムステルダムというヨーロッパ大陸の都市を経由した方が早いので、今回も私はそのルートで日本に参りました。

意外に知られていないかと思いますが、ノリッチは一七〇〇年代ぐらいまではイングランドの中でロンドンに次いで大きな街でした。ヨーロッパ大陸との交易で産業が栄えていたのです。ところが、産業革命に乗り遅れたために、街はその後少しづつ衰退していきます。しかし、そのおかげで中世の街並みがしっかりとそのまま保存されました。ノリッチでは今日も歴史的な街並みが楽しめます。スライドに見えているのは大聖堂でして、イギリスの中で二番目に高い尖塔を誇っています。十一世

紀に建造が始まりまして、今でもとても立派な大聖堂が見られます。

こちらのスライドに見えているのが、大聖堂の区画内にあるセインズベリー日本藝術研究所です。大英博物館と連携していろいろな日本の芸術、文化関係の研究プロジェクトを行っています。二〇〇九年には大英博物館と組んで日本の土偶の展覧会を行いました。とても盛況でした。もっと最近の展覧会では、先月に大英博物館にて春画展が始まりましたが、これも大盛況だとうかがっております。

こちらに見えますのがイースト・アングリア大学です。とても緑の多いキャンパスにあります。私のオフィスもこちらにあります。セインズベリー視覚芸術センターという大学博物館の中に位置しています。ノーマン・フォスターという世界的に有名な建築家がありますが、彼がまだ無名だった時に手がけた第一号の公共建造物です。

スライドの手前に見えますのは、ヘンリー・ムーアという有名な現代彫刻家の作品です。こちらも、まだ彼が無名だった時の作品で、芸術振興に尽力したロバート・セインズベリーさんが買い取って、ここに設置されることになりました。

このことからもお分かり頂けます

「パブリック・アーケオロジーから文化財保護への提言」

ように、イースト・アングリア大学は文化に関する研究や活動をとて大事にしている大学です。加えて、ノリッチという街には歴史的建造物がとてもよく残っていますので、文化遺産に関する研究を行うにはとても適しているのではないかと思います。以上、ノリッチの説明でした。

それでは本題に入ります。「パブリック・アーケオロジーから見た文化財保護への提言」というテーマでお話をさせていただきます。まず述べなければならぬのは、パブリック・アーケオロジーとは何かであります。先ほど戸荻先生からもお言葉を頂きましたが、カタカナ用語で結構分かりにくいかと思えます。私自身、このカタカナ語を決して気に入っているわけではないのですが、ほかの訳語がどれだけ考えても思い浮かばないため、今のところはこのカタカナ語を使っております。もしもこれよりも良い訳語がありましたら、ぜひとも教えて頂ければ有り難いです。

私の中でこのパブリック・アーケオロジーをどう定義しているかと申しますと、考古学を現代社会との関係において考察し、その考察に基づいた実践によって両者の関係を改善していこうとする試み、となります。すなわち、考古学と社会との関係

について研究・考察を行い、その成果に基づいて実践を行い、考古学を現代社会にとってより意味のあるものにしていく、そういう試みであります。

ここで二点注意すべきことがあります。考古学は、過去を探索する学問なのですが、パブリック・アーケオロジーは過去ではなく、過去と現代との間の関係を考える領域です。もう一点は、パブリック・アーケオロジーは考古資料というモノだけではなく、ヒトも考察対象とするということです。考古学が考察対象とするのはモノになるのですが、現代と過去との関係を考えるパブリック・アーケオロジーにおきましては、ヒトも考察対象となります。

少し用語の整理をしておきたいと思えます。これがなかなか重要なポイントになるかと思えます。

まず「パブリック」です。これがパブリック・アーケオロジーという言葉葉を日本語に訳しにくい原因となっています。英語の public という言葉の中には二つの意味が含まれています。その二つを同時に表す日本語がありません。

一つ目の意味は、「公共」です。「お上」と言ってもよいかもしれませんが。英語で言いますと public bodies「public building」 public office と

いった表現に使われる public がこの「公共」という意味を指します。

それに対しまして、もう一つのパブリックの意味は、「市民一人一人の総意」や「人々」というものです。これは public opinions「public movement」という表現の中の意味合いです。

「公共」と「市民」の両方を同時に表す日本語がないため、私はパブリックというカタカナ語を使っております。パブリックには二つの意味があるということをぜひ覚えておいていただきたいと思えます。これに関しましては、また後ほど触れることになるからです。

続きまして、アーケオロジー。アーケオロジーは日本語では「考古学」になります。本日の講演の中では、考古学と同時に歴史学についても考察したいと思えます。文化財保護を考える上では、考古学だけではなく歴史学も考察の射程におさめなければならぬためです。

考古学は、人々が残した物的資料を通して過去の理解を目指す学問です。それに対して歴史学は、人々が残した文字資料を通して過去の理解を目指します。モノを通すか文字を通すかの違いはありますが、考古学も歴史学も共に過去の理解を目指す学究的営みです。

ここで少し注意が必要なのは、我々が日常生活の中で使う「歴史」という言葉は、たいていの場合は「過去」という言葉に置き換えられます。例えば、我々が「歴史の理解は大切だ」と言うとき、「歴史」は「過去」を意味します。これは広義の意味での「歴史」です。それに対して、狭義の意味の「歴史」は、文字を通して過去を解明する学問です。

本日の講演では「歴史」はあくまでも歴史学という学究的営みだという意味で使います。従いまして、考古学も学究的営みであって、歴史学も学究的営みであって、両者共に過去の理解を目指すものであるというふうに、講演の中では位置づけさせていただきます。

続きまして、文化財と文化遺産という二つの言葉を考えてみましょう。文化財と文化遺産という言葉がありますが、皆様はどちらの言葉の方が馴染みあるように感じられますか。私の感覚では、文化財という言葉の方がずっと前からあって、文化遺産という言葉は比較的最近の言葉のように思えます。皆様もそのような感覚をおもちでしょうか。

国会図書館のオンラインでのデータベースを使って「文化財」という言葉を含んだ公刊物、いわゆる出版物や行政の公式報告書も含まれた公

刊物が、一九四〇年から二〇一二年までにどれほど公刊されてきたのかを年次で示したのがこちらのグラフです。グラフからお分かりいただけるかと思いますが、文化財という言葉が含まれた公刊物は一九五〇年代から少しずつ増えていきまして、基本的に右肩上がりです。一九九五年ぐらいからはあまり変動はなくなりますが、基本的に一九五〇年代からずっと少しずつ使われる頻度が増えてきました。

同じことを、「文化遺産」という言葉においても調べてみました。一九五〇年代ぐらいから「文化遺産」という語が含まれた公刊物はしばらくほとんどなかったのですが、一九九〇年代を過ぎたあたりから急激に増えてきました。

この二つの傾向はどう説明できるのでしょうか。文化財は、一九五〇年に制定された文化財保護法の中で定義・規定されています。実際、文化財保護行政の中で文化財という言葉は使われていますので、その言葉の使用頻度も少しずつ増えてきたことにはある程度理解できます。五〇年代に制定された法に沿って文化財行政がなされるに伴って、「文化財」という言葉の頻度も増えてきたのです。

一方、「文化遺産」ですが、日本の中でこの用語がさかんに使われ始めた

のは、日本がユネスコの世界遺産条約に加盟した一九九二年以降です。このユネスコの条約自体は一九七二年に採択されるのですが、日本政府はそれから二十年後に加盟することになります。その後、ユネスコの事務局長に日本人の松浦晃一郎氏が就任したこと、TBSの「世界遺産」というテレビ番組が好評を博したということもあって、文化遺産という言葉が日本の中でだんだんと使われるようになっていきます。

一九九二年以前にも「文化遺産」という言葉はほんの少しだけ使われていましたが、これは英語の *cultural heritage* やそれに対応するフランス語やスペイン語の言葉を和訳で紹介するときなどに使われていたものです。日本語の中で「文化遺産」が市民権を得るのには、一九九二年以降を待たねばなりません。

とは言え、現時点ではまだ圧倒的に「文化財」という言葉の方が使われる頻度は高いです。おそらく、将来的に「文化遺産」という言葉はもっと使われるようになり、両語の使用頻度の差は縮まると思いますが、少なくとも今のところは、「文化財」の方が「文化遺産」よりも一般的に使われていると言えるでしょう。その理由は、やはり文化財保護法に則った文化財行政に求められます。

「パブリック・アーケオロジーから文化財保護への提言」

両語の使用頻度の推移を同時に示したグラフがこちらです。文化財の方がまだ一般的によく使われていますが、文化遺産という言葉も次第に使われてきていることが分かるかと思えます。私は日本語で「文化遺産」という言葉を最初に聞いた時、変な言葉だなと思いました。一九九〇年代前半の頃だと思います。それから二十年ほど経った今、この言葉に違和感を感じることはなくなりました。多くの人が継続的にこの言葉を使ってきたからです。人の意識というのはそのようなものかと感じております。

今まで申ししてきたことを勘案しますと、文化財と文化遺産というのはほぼ同じ意味だと思われるかもしれませんが。しかし、私は両者は根本的に違ったものだと考えております。

文化財は、専門的知見によって支えられ、文化財保護法に依拠しながら法的・行政的に規定されるものです。それに対して、文化遺産は人々が過去に愛着や誇り、アイデンティティを感じる媒体です。

文化財と文化遺産が合致する場合もたくさんあると思うのですが、そもそもの意味が違いますので、両者が完全に合致することはありえません。このことを、いくつかの事例を通してお話ししたいと思います。

スライドに見えますのは、今から十五年ぐらい前に撮った写真です。ここには「愛せよ文化財、清めよ山河」と書かれた看板が見えます。奈良県にある当麻寺という有名なお寺にこの看板は立てられていました。

「愛せよ文化財」と書かれています。が、愛せよという感覚は、他人に言われて感じられるものとは思えません。ですの、この看板を見たときには、なんとも言えない違和感をおぼえました。

今では、この違和感の原因が、文化財と文化遺産との間の差によって説明できるのではないかと考えるようになりました。先ほども申しましたように、文化財は法律に沿って、専門家の意見を聞きながら行政的に定められるものでありますが、必ずしも人々が愛着を感じているものではありません。そしてそうであるがゆえに、文化財を愛しましょう、と誰かがわざわざ言わなければならぬのです。これがもし文化遺産であれば、それは最初から人々に愛されているはずですので、あえて愛しましょうという必要がありません。

ところが、行政あるいは専門家の立場からしますと、専門的な知見に支えられ、文化財保護法にのっとって公正かつ妥当性をもって決める文化財は、当然文化遺産であつてもら

わなくては困ることになります。公明正大に文化財を決めたわけですから、そこに人々はアイデンティティを感じるはずだ、愛着を覚えるはずだ、誇りを感じるはずだと、そう考えるようになります。

先ほども申しましたように、現実には文化財の多くは人々に愛されていたり、誇りを感じる対象であつたりするわけですから、文化財イコール文化遺産という図式が成立するとはよくあります。そのときにイコールの等号を支えるのは専門知識であり、それは考古学者の専門知識であつたり、歴史学者の専門知識であつたりします。専門知識が公的な権威の根拠となるわけです。

しかし、人々が愛着を覚えるもの、誇りを覚えるもの、アイデンティティを感じるものというのは、専門知識とはまったく異なる次元で決まります。したがって、文化財イコール文化遺産の図式が成り立たない場合も必然的に出てきます。文化財であつても文化遺産ではないものが現実には結構あるのは、ある意味で当然のことなのです。

このことを顕著に表すのが、最近増えてきた、文化財保護法の枠組みとは無関係にさまざまな人々が「勝手に」文化遺産を決めていく試みです。たくさんあるこうした試みの中

からまず例示したいのが、雑誌『芸術新潮』が二〇一〇年に出した特集号「わたしが選ぶ日本遺産」です。この特集では、いろいろな識者の方が日本遺産を選びました。例えば源氏物語絵巻ですね。これは文化財にもなっていて、さらに選者はこれが文化遺産だと思ったわけですから、文化財でもあり文化遺産でもあることになります。もちろん選者にとって、ということですよ。

別の例としては、柵田がありました。これもとても美しい情景でありまして、識者がなぜこれを日本遺産として選んだのかもよく分かります。すべての柵田が文化財指定されているわけではありませんが、中には文化財指定を受けているものもあります。文化財指定を受けているようがいまいが、美しい柵田は人々の心を打つと言えるでしょう。したがって、文化財であるかどうかを問わず、柵田は人々が愛着を覚える文化遺産だと言えます。

次は、日本の皇室です。これは当然、文化財指定は受けていません。しかし、これを選んだ方によりまして、人々が皇室にアイデンティティーを感じる限り、それは文化遺産だということになります。

続いては、電線や電信柱のある風景です。これも考え方によっては文

化遺産です。電線や電信柱を含んだ風景にアイデンティティーを感じるという感覚は、私もまったく分からないわけはありません。しかし、これは当然、文化財指定を受けていません。選んだ方によると、これは文化財ではないが文化遺産だということになります。

このことをさらにはつきり示していた例が、朝日新聞の関西版が二〇〇四年度から始めた「勝手に関西世界遺産」というシリーズです。このシリーズでは、七人の識者の方々が毎週かわるがわるに「勝手に」関西世界遺産を選んでいきました。シリーズは好評だったため、本にもなりました。この本の中で選ばれた関西世界遺産を見ますと、実にいろいろなものが含まれています。阪神タイガース、「なんでやねん」、おばちゃん、たこ焼きなどです。これらはどれも文化財には指定されていませんが、確かに考えようによって文化遺産と言えなくはありません。

このことからもお分かりいただけるかと思うのですが、文化財イコール文化遺産の等号が成り立たない事例が少なからずあります。しかし、だからと言って、「愛せよ文化財」の看板を立てた方の気持ちが分からないわけでもありません。とても立派な当麻寺ですから、これを大事にし

ましょう、と訴えかけたい気持ちはよく理解できます。

次は考古学の事例になるのですが、私は最近、古墳についていろいろと調べておりまして、大阪府高槻市にあります今城塚古墳を訪ねました。この古墳は、継体天皇のお墓だと考古学の世界では一般的に考えられています。この古墳では最近、大規模な整備が行われました。整備の結果、古墳にはスライドでご覧いただけるような解説板が置かれました。

こちらのスライドでご覧いただいているのは、古墳にて儀式が行われた、造り出しと呼ばれる部分です。ここでは約八百体の埴輪が復元されて置かれています。そしてここにもやはり、解説パネルが置かれています。パネルには漫画のキャラクターが使われています。

さらには、鍵穴状の前方後円墳が復元され、子供たちの遊び場となっています。行政はこうした整備を行って、古墳という文化財を分かりやすくプレゼンテーションし、人々が親しみや愛着を持って古墳を楽しめるようにがんばっています。市民の方々にこの文化財を文化遺産として楽しんでもらいたい、という意図が読み取れるかと思えます。

同じ高槻市には、新池ハニワ工場公園という別の遺跡もあります。こ

「パブリック・アーケオロジーから文化財保護への提言」

の遺跡では、かつて埴輪がつくられていて、この工場で作られた埴輪が今城塚古墳に使われていたと考えられています。このハニワ工場でも同じように解説パネルが置かれていて、埴輪を作っていた窯が分かりやすく復元されています。この解説パネルでも漫画のキャラクターが使われていて、有名な漫画家のヨシトミヤスオさんが描かれたものです。

解説パネルの漫画はずっとつながっていて、左から右へと読めるようになっていきます。行政は、この文化財に対して市民に愛着を持ってもらうために、すなわち文化遺産として認識してもらうために、漫画やイラストを工夫して努力しています。

ハニワ工場公園内の施設では、先ほどの漫画をまとめて冊子にして売っています。八百円ぐらいです。現地で解説パネルに印刷された漫画を見て面白いと思ったら、これを買って後で勉強できるようにしています。

これらは全部、高槻市の教育委員会が行っていることです。先ほどの今城塚古墳に戻りますと、その横には博物館がありまして、二〇一一年に古墳の整備と同時にオープンしました。この新しい博物館もなかなか面白い展示を行っています。例えば、このように継体大王が埋葬されたの

ではないか、と一目で見られるような復元が行われています。また、古墳の表面に葺石^{ふきいし}という石が並べたときの情景も復元されています。

こうした教育活動を通して、行政は、専門家が選んだ文化財を、市民にとって親しみのあるものにしよう、すなわち文化財を文化遺産にしようとかんがっています。

ところが、現実には文化財の中には人々が愛着を感じていないようなものも含まれます。専門家以外には誰も関心を抱いていないような文化財が存在しないか、専門家以外は誰にも知られていないような文化財が存在しないかと問われて、自信をもってNOと断言できる人はなかなかいないと思います。現実には、人々が愛着を感じていないような文化財は存在します。すなわち、それは文化財ではあるけれども、文化遺産ではないということ。もちろん、そのような文化遺産ではない文化財を限りなく少なくしよう、と行政は努力しています。

ということで、文化財イコール文化遺産というのは、行政が目指すゴールではあるのですが、同時に行政が立场上示さなければいけない建前と言ってもよいかもしれません。すなわち、文化財と文化遺産は実は完全には合致しないということを理

解しつつも、行政としては、自分たちが決めた文化財ですから、そこに人々は愛着を感じてくれている、と言わなければならなくなります。

そういう建前があるわけですから、行政が使う言葉の中では、文化財は文化遺産とほぼ同じものという位置づけになります。ですので、例えば、行政が作成する公刊物の中では、文化財は文化遺産と同等のもののだとして使われていることが多いのです。そして、そうした公刊物を見ているうちに、我々も何となく、文化財は文化遺産と一緒にもののだと感ずるようになります。しかし、両者はそもそも根本的に異なる、というのが私の意見です。

文化財と文化遺産の差は、パブリックという言葉がもつ二つの意味にも関連していると思います。われわれが「パブリックの文化財」と言ったとき、それは「公共財としての文化財」を意味します。これに対して、文化遺産は市民・人々がつくっていくものであって、そういう意味でのパブリックな存在なのだと思います。ということで、パブリックの二つの意味というのは、文化財と文化遺産の違いにも対応しているのです。

次に、考古学・歴史学と文化遺産の違いをちょっと考えたいと思います。

考古学と歴史学は、過去をできるだけ客観的に理解しようとしています。当然、過去のことですから一〇〇％理解はできないのですけれども、学問ですから学問的な手続きを経て、なるだけ過去を客観的に理解しようとするのが考古学あるいは歴史学という学究的営みだと思っています。それに対して文化遺産というのは、過去を称揚する、あるいは記念する存在だと思っています。すなわち、ここにもやはり差があります。

考古学・歴史学と文化遺産との差というのは、二〇年ほど前に議論になりました、過去は異国か、という議論の中で顕著にあらわれました。

歴史学者は、過去は異国であると主張しました。その根拠は、過去というのはいわゆる我々の世界とは異なっていた、離れたものだから、というものでした。つまり、我々にとっては親しみのないものだから、過去は異国なのだ。

このように歴史学者が主張したのに対して、文化人類学者たちは、過去は異国ではないと言いました。過去は常に現在において概念化され、理解されるものだから、というのがその根拠です。過去は常に我々の頭の中にしかないものだから、それは異国ではない、現在に限りなく直結したものであると。

歴史学や考古学は過去を客観的に理解しようと努めます。これはつまり、過去と現在の間に明確な距離を見いだしていることになります。こうした姿勢こそが、歴史学や考古学にある程度の客観性を担保してくれるのだと思います。それに対して、文化遺産は過去を称揚あるいは記念しようとするものですから、過去を現在において意味をもったものにするようにします。

考古学・歴史学と文化遺産は、このように対比できるのではないかと思います。考古学・歴史学では過去と現在とが完全に分離されているのに対して、文化遺産では両者が同時に存在している、という感じでしょうか。

考古学・歴史学というのは専門知識に支えられるものですから、文化財と親和性が高いことになります。考古学・歴史学を専門にする人は、文化遺産よりも文化財を第一の関心として考えることが多いのに対して、専門知識とは全く実次元で一般の人々は文化遺産をつくっていきまします。この両者の違いはしっかりと確認しておいた方がよいのではないかと思います。

考古学・歴史学は文化遺産と違うものであれば、どのように関わっていくべきかという問題が出てきま

す。このときにパブリック・アークエロジリーにおける四つの取り組み方、私が四つのアプローチと呼んでいるものが参考になるかと思っています。教育、広報、多義、批判の四つのアプローチです。教育・広報アプローチは比較的分かりやすいのではないかと思います。多義・批判アプローチは少し馴染みがないかもしれませんが、その中で、それぞれ事例を示しながら説明していきたいと思っています。

まず、教育・広報アプローチの例を示します。東京大学の本郷キャンパスの中で行われている発掘調査の前を通りがかったとき、発掘から出てきた遺物が展示されて説明されていました。そこにあった解説版の説明を読むと、通りがかった人は、「何だ、これは？」となり、写真を見て、実際に隣で発掘している情景を見て、「ああ、この発掘から出てきたものを展示しているのね。こういうものが出てきたのか」と分かるようになっていました。ここで狙いとされているのは、教育効果であり、同時に広報効果です。この例で言いますと、東京大学の歴史をより多くの方々に知ってもらい、そうすることによって大学のアピールをしようという戦略とも言えるかと思っています。これと似たような例を最近、イギリスのヨークという街で見かけまし

「パブリック・アーケオロジーから文化財保護への提言」

たので、これも紹介しておきます。それは、ハンゲートという地区での発掘調査にて見かけたことでした。発掘調査は一般的には公開されていない、市民には見えない場合が多いと思います。しかし、これは発掘調査を市民に見せている例でした。

しかし、それは丸見えということではなく、のぞき穴からのぞいて初めて見えるようになっていました。近くに設置された説明パネルでは、こういう発掘調査を行っていますよ、という説明は書かれているのですが、ただ単に前を通りがかっただけではその様子は見えません。ところが、壁に分かりやすくのぞき穴が開けてありました。人間の心理は面白いものでして、人は穴があるのとどきたくなるものです。通りがかる人たちは見事に立ち止まってその穴を覗き込んでいました。そしてのとくと、発掘調査が見えるようになっていました。全面的に見えるようにするよりも、のぞき穴をつけた方が人はより見たくなるのだ、というところが分かって面白かったです。これは、教育と広報の両方を兼ねた事例と言えるでしょう。またさらには、この発掘調査の「Sight Tour」、すなわち見学ツアーにも参加できるようになっていました。あとは、発掘調査に携わる人たちの写真も展示さ

れていました。こんな感じで発掘を行っています、という広報効果があります。

古写真を示して、このハンゲートの地区は昔このような感じでしたという展示も行われていました。発掘調査はたいいてい壁で囲われているのが一般的ですが、その無機質な壁を利用して、調査のアピールがなされていました。壁には、地元の高校生たちが発掘からインスピレーションを受けて作った絵画も展示されていました。

日本は、実はこういう考古学の教育・広報活動に関してはかなり進んでいます。別の例になりますが、大阪歴史博物館には、なにわ考古研究所という考古教育の施設が入っています。ここでは訪問者は、ハンズオンを通しての考古学の学習活動に参加できます。例えば、バラバラになった遺物のレプリカを接合しましょう、地層のレプリカを並べ替えて、下には古い層が、そして上には新しい層がくるようにしましょう、といった仕掛けが用意されています。体験発掘もできます。発掘現場が復元されていて、指導員のガイドダンスの下に、子どもたちが発掘を疑似体験できるようになっています。このように、考古学の教育に関しては、日本には進んだ事例がたくさんあります。

こうした教育活動を行うことによって、文化財イコール文化遺産という図式が成り立つようになるのだと思います。文化財に対して人々が知的関心をもってもらうことによって、そこに愛着が芽生え、文化遺産になる、ということだと思っています。

別の事例として、群馬県高崎市にある保渡田古墳群を示したいと思います。三つの大きな前方後円墳から成る古墳群は、国の史跡指定を受けています。そのうちの一つの古墳、二子山古墳では、「情景復元」が行われています。これは、あまり人の手は入れずに、古墳の外観を見せるやり方です。表面に生えていた草木を伐採し、芝生で覆うことによって、古墳の形が見えるようになっていきます。頂上に行きますと、そこから出土した石棺が実際の寸法で写真を通して展示されています。石棺の横には解説パネルが置かれていて、柩の中に何が入っていたかが説明されています。これも、教育活動の例です。保渡田古墳群の別の古墳、八幡塚古墳に行きますと、より進んだことが行われています。この古墳では、古墳時代に造られた当時の姿に古墳が復元されています。例えば、石棺が出土した場所に置かれていて、ここから石棺が出たのだな、と確認しながら見られるようになっていきます。

古墳の周辺に置かれている埴輪の一つ一つには、作った人の名前が作成日の日付と共に刻まれています。これらは実は地元の人々が作った埴輪です。全部で六千ほどの埴輪が復元されて置かれたのですが、大部分が市民の作ったものです。そして、作成者の名前を残せる仕掛けになっていたのです。ですの、作った人がこの古墳に、例えば自分の子供を連れて行くと、「ほら、パパの名前がここに刻まれているだろう」と、埴輪を指差しながら説明できます。つまり、地域住民がこの古墳に感情移入できるシステムをうまくつくったのです。これも、文化財を文化遺産にするとも考えられた仕掛けなのではないかと思えます。

スライドに見えますのは、埴輪を作っている工房の様子です。工房で何度もワークシヨップをして、六千弱の埴輪を作り上げました。こうすることによって、行政は労働力もすべて自前で負担しなくて済みました。市民が喜んで参加したいと思う仕掛けだったからです。両者にとってもプラスになるいい仕組みだと思っています。

このように、日本は教育的・広報的アプローチに関しては世界的に見てもかなり進んだことをやっています。一方、多義的・批判的アプローチ

チに関しては、まだそれほど根付いていません。次にこれについてお話しさせていただきます。

まず、多義的・批判的アプローチが何かというのを説明いたします。教育的・広報的アプローチを採用した場合、例えばある遺跡、歴史的建造物、遺物などがあつたときに、専門家はこれらを特定し、分類しようと試みます。それからその化学組成を考えたり、機能や用途は何であったのかを考えたり、いつ作られたのかを決め、そしてそれがどのように分布していたのかなど考えます。

教育・広報というのをやるときには、基本的にこの専門家と同じ流れで得た情報をどのように伝えるかということが主眼になります。すなわち考古学・歴史学から市民にどのように情報発信をするか、がポイントとなります。その情報発信は、例えば、博物館や遺跡、歴史的建造物における解説、出版物、インターネットなどの媒体を介します。そしてこの情報発信の精度をなるべく高めることによって、より多くの市民に情報を伝え、より多くの市民に関心を持ってもらう、というのが教育的・広報的アプローチの基本的な考え方です。

これに対して、多義的・批判的アプローチを採用すると、出発点がそ

もそも違ってきます。専門家が遺跡や遺物をどう理解するのかだけではなく、行政は遺跡や遺物をどう理解するのか、土地所有者は遺跡や遺物をどう理解するのか、企業は遺跡や遺物をどう理解するのか、というようなことをまず考えます。同じように、先住民が遺跡や遺物をどう理解するのかということも考える必要があります。日本の場合でも、例えば北海道においてはアイヌの方々や遺跡をどう理解するのかということを考慮する必要があります。さらには、政治家が遺跡や遺物をどう理解するのか。そしてまた観光客はまた異なる理解をしていることでしょう。多義的・批判的アプローチにおいては、これらの社会に存在するさまざまな遺跡や遺物をどう理解するのかをまず理解するところから始めねばなりません。さまざまな社会集団の理解や関心をまず押さえるのです。

このことを、少し例を通して示したいと思います。平城遷都千三百年祭が三年前に奈良の平城宮で行われました。大極殿の復元も行われ、集客という意味では大成功を収めたイベントでした。

平城宮遺跡に行くと、有料で天平時代の衣装を着ることができました。収益を上げるシステムがいろいろな所で導入されていたのです。

「パブリック・アーケオロジーから文化財保護への提言」

広報用のキャラクターも採用されました。「せんとくん」を覚えていらっしゃるでしょうか。「せんとくん」は日本中のいろいろな場所に登場しました。

東京の都営バスにも登場しました。オンラインの有料ゲームにも登場しました。このスライドでは、「せんとくん」は「ひこにゃん」と対決しています。学問的な遺跡の意味とは完全に別次元で「せんとくん」は登用されました。

カプチーノに「せんとくん」が描かれた例もありました。カプチーノの中の「せんとくん」を見たくて、お客がお金を払うシステムです。

また、平城遷都千三百年祭の会場では、ありとあらゆる「せんとくん」グッズが売られていました。

これらの例を通して何が言いたいかと申しますと、専門家が遺跡をどう解釈するかというのとはまったく別次元で、民間企業が遺跡のイメージを使って利益を出すシステムをさまざまなかたちで考えだした、ということなんです。当然、観光客もこういうことが好きで、実際商品を買うことによってこういうビジネスが成立するわけなのですが、これも従来の教育・広報の発想だけではなかなか出てこないことだと思えます。

こうした多種多様の遺跡の使い方

は、多義的アプローチを採用することによって見事に浮かび上がります。

続きまして、批判的アプローチの例を挙げたいと思います。批判的アプローチというのは何かと言いますと、批判精神をもって考古学・歴史学の社会的あり方を考える、ということです。このときの批判的考察の対象が何かと言いますと、放っておくと社会的強者にとつての都合のよいことをもつぱら考えてしまう政治体制です。

具体的な例を挙げて示しますと、月輪古墳というのが岡山県にあります。この古墳は、考古学の関係者には広く知られたものでして、一九五三年に発掘調査が行われるのですが、一万人が参加したと言われています。発掘は、戦前・戦中の皇国史観に基づいた歴史解釈、すなわち天皇を中心とした歴史解釈を批判するという趣旨で企図されました。ですから、民衆の歴史を自分たちの手で、民衆の手によって明らかにしようという意識で始まったのがこの発掘調査なのです。

驚異的なことに、三カ月強の発掘調査なのですが、約一万人の人が参加しました。いわゆる社会的弱者と言ってもいいのでしょうか、朝鮮人、在日の方も参加しました。また

三笠宮も調査に参加しました。費用は参加者のカンパによって賄われていたという、今の我々の感覚からすると信じられないような発掘調査でした。これは批判的なアプローチの例です。

全く別のオーストラリアの例も示します。イギリス人による調査が百年以上前に行われて、オーストラリアの先住民族の人骨が発掘されて、さまざまな博物館に持ち去られました。人骨の中には、イギリスに持っていかれたものもありますし、オーストラリアの博物館に保管されたものもあります。

それに対して、近年、先住民族が先祖の人骨を返せと、自分たちにとつては神聖な骨であるから返せと、要求を出しました。オーストラリアの先住民族は、歴史的に社会的抑圧を受けてきました。その彼ら社会的弱者の声が、最終的には聞き入れられて、三十一体の人骨が戻され、埋め戻されました。

せっかくの研究資料を返して埋めてしまうなんて、何てことをするのだということ、反発する考古学者もいたのですが、最終的には先住民族の声が社会的に支持され、骨は再埋葬されることになりました。

遺物の返還というのは決して北米やオーストラリアだけの問題ではな

く、私が今住んでおりますイギリスでも同じような問題が最近起こりました。ストーンヘンジのすぐ近くに、エイヴリー (Avebury) という環状列石で有名な遺跡があるのですが、ここの博物館にチャーリーと名付けられた先史時代の子供の人骨が展示されています。数年前、ドルイド (Druid) という神秘的な宗教を信仰する人々が、その人骨が自分たちの先祖のものであるから、博物館で展示するのは冒瀆だと主張し、埋め戻すべきだと要求しました。

これを受けて、日本の文化庁にあたるイングランドのイングリッシュ・ヘリテージという機関が、人骨は本当に埋め戻すべきなのかということについての意見をさまざまな機関・団体に求めました。その結果、戻さなくて良いと意見が圧倒的に多く出され、それを受けて、人骨は今でも同じ博物館で展示され続けています。ですので、この場合は、社会の中のごく一部の人々の声は通らなかったこととなります。こういう人々を説得させるためにも、多数の人々の意見を聞いてみる必要がある、という事例です。私もこれは埋め戻さなくてよかったと思っています。

このように、社会には遺跡や遺物の取り扱いに関してさまざまな意見

があります。その中には、妥当と思うものもあれば、妥当ではないと思うものもあります。そうしたいいろいろな意見を勘案しながら遺跡や遺物をどう取り扱うかを考えねばなりません。それはやはり、公共財としての文化財としての意識、あるいは考古学・歴史学の枠組みだけにとどまってい

たら分らないかと思います。市民がつくり出していく文化遺産という考え方を意識することによって、社会にはいろいろな遺跡・遺物の認識があつて、それらを考慮してバランスの取れたマネジメントの判断をしなければいけないというのがより明確になるのではないかと思います。先ほども示した保渡田古墳群の二子山古墳、ここでは情景復元が行われた、と先ほど申しました。実はこの古墳は、地元の人の間では、花を愛でる場所としても有名です。毎年秋になりますと、コスモスがきれいに花を咲かせまして、これを目当てに人々がやって来ます。こういった古墳の意味や理解は、考古学・歴史学の学問的枠組み、あるいは文化財の枠組みにとどまっていたら分かりません。

保渡田古墳群の中の三つ目の古墳は、薬師塚古墳です。ここはまだ整備になっていない古墳です。ここに行きますと、古墳が完全に草木に覆

われているのが見えます。隣にはお寺が立っています。お寺がある場所には往々にして墓地もありますが、ここもその例外ではありません。

この薬師塚古墳は今日でも当然、仏教の信仰の場所として機能しているのですが、その周辺にはいろいろな石碑も立っています。たとえば、庚申塚があり、江戸時代には庚申信仰の場所であったことがわかります。墳頂、すなわち古墳の一番上に行きますと、薬師堂が立っています。ここでは今でも薬師信仰が続いています。その隣には、古墳から出てきた石棺が展示されていると。

おそらくこの薬師塚古墳に行った人は、お墓やお寺や薬師堂を見て、そこが民間信仰の場なのだとすぐに知覚できると思います。しかし、ここにある解説パネルを見ますと、これは何世紀の古墳であつて、出土品には古墳時代のこういう物が含まれるという解説しか入っていません。すなわち、専門家から見た古墳の説明はしっかりなされているのですが、地元の人がこの古墳のことをどう感じてきたか、あるいはその古墳とどのように付き合ってきたのかについての説明は入っていません。

この古墳には史跡指定がかかっていますので、指定をした理由が解説パネルには書かれなければなりません。

「パブリック・アーケオロジーから文化財保護への提言」

ん。そのことはとてもよく分かるのですけれども、おそらくこの中で抜けているのは、専門家以外の目から見た古墳の意味だと思います。

ここからは、少しずつまとめの方へ向かいたいと思います。

パブリック・アーケオロジーの四つの取り組み方の事例を紹介してきましたが、日本は教育的・広報的アプローチに関してはかなり進んでいるということがお分かりいただけたかと思います。一方、多義的・批判的アプローチの考え方は日本にはまだそれほど根付いていません。

実は、この両者の間には論争がありまして、多義的・批判的アプローチを採用する人は、教育・広報的アプローチを採用する人を権威主義的である批判しました。専門家から人々に情報を一方的に、権威主義的に流しているのではないかと、というのが理由です。それに対して、専門知識の枠組みを外れたところから遺跡、歴史的建造物、遺物を理解しても意味がないのではないかと、そんなのは非科学的ではないか、という逆の批判もありました。このように、教育・広報的アプローチを採用する方と、多義的・批判的アプローチを採用する方の間には激しい批判合戦が繰り広げられてきました。

この論争は、考古学・歴史学と文

化遺産の違いとも関連しているのではないかと考えられます。

我々は、今まで文化財保護行政を考える中で、公共財としての文化財を考え、どのようにして教育活動を行うか、あるいは広報活動を行うかということには長けてきたのではないかと思います。しかし、人々が文化遺産に対して愛着、誇りやアイデンティティを持つプロセスというのは、必ずしも文化財の論理とは違うものでありますので、これからはこちらのことをもっと考えていってもよいのではないかと思うわけです。人々の視点から、すなわち文化遺産の視点から、文化財を考えてみませんか、ということです。

まとめに入ります。この発表の中では、まず文化財と文化遺産がいかに違うのかということを話しました。文化財が法的・行政的に定められるものに対して、文化遺産というのは人々の愛着、誇り、アイデンティティといったものによってつくられるものであります。この文化財と文化遺産の違いは、考古学・歴史学と文化遺産との違いに対応しています。

市民が公共の文化財に対してよりアイデンティティを感じるようにする、すなわち、人々が文化財をより文化遺産として認識するようにする

ためには、考古学や歴史学の枠組みを少し離れて、社会に存在する多様な価値観を認めてあげることが大切なのではないかと思えます。そしてこのプロセスにおいては、パブリック・アーケオロジーの批判的・多義的アプローチの考え方が参考になるのではないかと思います。

以上で私の話を終わります。ありがとうございました。